

# 主観的幸福感の尺度間及び健康, 財政状況, 孫との関連

—— Ryff の感情尺度と Lawton のモラル・スケールを用いて ——

平 賀 明 子

## 目 次

- I. 問題の所在
- II. 調査の概要および分析の方法
- III. 分析結果
- IV. 結論と今後の課題

## I. 問題の所在

主観的幸福感 (SWB) は Lawton (1975) によって改訂 PGC モラル・スケールとして尺度化が行われ, わが国では老年社会科学の領域において研究が進められてきた。改訂 PGC モラル・スケールの質問紙は「はい」「いいえ」の二者択一からなり, 17項目6つの尺度から構成される。そのうち, 幸福感を測る有効な尺度は古谷野 (2003) によれば, 「老いに対する態度」(努力しても動かし難いような事実を受容できる), 「心理的安定」(自分自身について基本的な満足感をもっている), 「孤独感・不満足感」(環境の中に自分の居場所があるという感じをもっている), の3つであるとされている。

一方近年, アメリカではマッカーサー財団からの資金を得, 中高年期米国人の主観的幸福感を調査したデータ (MIDUS) (Ryff, C. D, 1989), 及びその日本人向けデータ (MIDJA) (Karasawa et al., 2001) をもとに「中年期の健康と社会的ネットワーク, 生活の質についての調査」(平賀, 2007) が行なわれてきた。なぜ中年期の幸福感かという問いに対して, 一つは, 個人にとって「幸福な老い」がどのようなものであるかを規定す

るものは中高年期をどのように過ごしたかに影響を受けるということ, 他の一つは, 主観的幸福感の構成する感情が現在もっとも注目されている健康予防に密接な関連がある (Ryff ら, 2003; Mroczek, 2003), というものである。Ryff ら (2003) の主観的幸福感 (SWB) を測る構成要素は, 「肯定的感情」と「否定的感情」(各々6項目) と, 「人生への満足」(1項目) の3つからなる合成尺度である。たとえば, 肯定的感情が高く, 否定的感情が低く, 人生満足感が高ければ, 主観的幸福感が高いとされている。

このように, 同じ主観的幸福感という用語ではあるが, それを構成する質問の内容, 質問の項目数, 評価の仕方に違いがある。にもかかわらず, Lawton (1975) の尺度と Ryff ら (2003) の尺度がどの程度関連があるかを明らかにした研究はきわめて少ない。

そこで本稿では, これら主観的幸福感を構成する尺度がどの程度関連しているかをみるために尺度間の相関を調べる。その際, 扱う尺度は Lawton (1975) の改訂 PGC モラル・スケールのうち, 古谷野 (2003) が有効な指標として挙げた「老いに対する態度」, 「心理的動揺」, 「孤独感・不満足感」の3つと Ryff ら (2003) の「肯定的感情」と「否定的感情」の2つ, 計5つの尺度である。

つぎに, 重回帰分析の手法によって, 各尺度を従属変数とし, 他の尺度を投入することで, 従属変数に対する独立変数の影響を調べる。その際, 独立変数には Ryff ら (2003)

の主観的幸福感の重要な要素の一つである「人生への満足」(1項目)も投入する。

また本稿では対象者が高齢者なので、高齢者の幸福感に関連するとされる本人の健康状態、日常生活の中で健康状態をどの程度管理しているかという健康管理 (Ryffら, 2003)、家計の財政状態、孫との居住距離を投入し、基本属性としての性、年齢、教育年数も加えてこれらの影響を検討する (布施, 2002: 直井, 2001)。さいごに、本稿で扱うデータは層化無作為抽出による調査から得られたものではない。したがって、Lawton (1975) の 3 つの尺度が先行研究 (平賀, 2004) で得られた尺度<sup>1)</sup>よりも信頼性を測る  $\alpha$  係数が低いことをお断りしておく。

## II. 調査の概要および分析の方法

【調査の概要】 本調査は、2005年7月に、本学の短期大学部女子109名に授業の一環として、祖父母世代に訪問面接聴取を実施させた。祖父母109名の内訳は、札幌近郊に住む男性21名 (19.3%)、女性88名 (80.7%)、年齢は69歳以下17名 (15.6%)、70~74歳44名 (40.4%)、75歳以上48名 (44.0%)、教育年数は中学卒業程度66名 (60.6%)、高校卒業37名 (33.9%)、短大以上4名 (3.7%)、不明2名 (0.2%) である。

【分析の方法】 Ryffの主観的幸福感を構成する2つの尺度「肯定的感情」「否定的感情」<sup>2)</sup> (各6項目: この1ヶ月間に経験した気分の程度を問う。5段階評価 (全く感じない~いつも))。Lawtonの改訂PGCモラル・スケールの3尺度<sup>3)</sup>、「老いに対する態度」4項目、「心理的動揺」5項目、「孤独感・不満足感」3項目 (各項目: 今の生活, これまでの生活についての考えを問う。2段階評価 (「はい」~「いいえ」))。これら5つの尺度間の相関を行う (分析1)。

つぎに、Ryffの2つの尺度とLawtonの

3つの尺度をそれぞれ交差させ、Ryffの尺度を従属変数とする場合はLawtonの3つの尺度は独立変数として、Lawtonの尺度を従属変数とする場合はRyffの2つの尺度は独立変数として投入し、重回帰分析を行う。その他に、独立変数にはRyffの「人生への満足」<sup>4)</sup> 1項目。10段階評定 (とても悪い~とても良い)。健康状態<sup>5)</sup>、家計の財政状態、孫との距離<sup>6)</sup>、健康管理、性、年齢、教育年数を加え検討する (分析2)。

## III. 分析結果

### 1. Ryffの2尺度とLawtonの3尺度間の相関分析結果

表1に示すように、Ryffの「肯定的感情」(Positive Affect 以下略してPAと記す)は、Ryffの「否定的感情」(Nositive Affect 以下略してNAと記す)とのあいだにマイナスの強い相関 ( $r = -.46$   $p < .001$ ) がみられ、これら2つの尺度は互いに独立している (Mroczek, D. K., & C. M. Kolarz, 1998) という先行研究と同じ結果であった。

またLawtonの3つの尺度との関連では、「老いに対する態度」( $r = -.38$   $p < .001$ ) と「孤独感・不満足感」( $r = -.40$   $p < .001$ ) とのあいだにマイナスの強い相関、「心理的動

表1 Ryffの2尺度とLawtonの3尺度間の相関

	NA	Morale2	Morale3	Morale5
肯定的感情 PA	-.46***	-.38***	-.27**	-.40***
否定的感情 NA		.36***	.43***	.30***
老いに対する態度 Morale 2			.36***	.29**
心理的動揺 Morale 3				.35***
孤独感・不満足感 Morale 5				1.00

\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$

表2 Ryffの2尺度に関する独立変数の重回帰分析

独立変数	肯定的感情	否定的感情
老いに対する態度	-1.09	1.34
心理的動揺	-.38	3.15**
孤独感・不満足感	-2.32*	.53
人生への満足	2.39*	-.70
健康状態	-.99	.50
健康管理	3.20***	-1.06
財政状態	.69	-1.25
孫との距離	.08	.03
性別	.19	-.15
年齢	-.65	-1.24
教育年数	.25	-.17
R <sup>2</sup>	.43***	.31***

\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$

揺」( $r = -.27$   $p < .01$ )では弱い相関認められた。

Ryffの「否定的感情」とLawtonの3つの尺度との関連ではどうか。3つの尺度すべてがプラスの強い相関(それぞれ $r = .36$   $p < .001$  :  $r = .43$   $p < .001$  :  $r = .30$   $p < .001$ )があり、Ryffの感情尺度はLawtonの3つの尺度間に強い関連を示唆する結果となった(表1)。

## 2. Ryffの2尺度を従属変数とした独立変数の重回帰分析結果

表2ではRyffの肯定的感情と否定的感情の2つの尺度を従属変数とし、Lawtonの3つの尺度および他の諸変数を独立変数とした重回帰分析の結果を示した(表2)。

その結果、Ryffの肯定的感情尺度に対して、Lawtonの「孤独感・不満足感」のみが弱いマイナスの影響を与え、その他にRyffの「人生への満足」がプラスの弱い、健康管理がプラスの強い影響を与えていた。つまり、孤独感・不満足感があまりなく、人生に満足し、健康を自分でコントロールできていると認識できていれば高齢者の肯定的感情を高めるようである。

一方、Ryffの否定的感情尺度に対しては、

表3 Lawtonの3尺度に関する独立変数の重回帰分析

独立変数	老いに対する態度	心理的動揺	孤独・不満足感
肯定的感情	-.70	.20	-2.30***
否定的感情	1.64	3.52***	.56
人生への満足	-1.13	-.86	-2.70**
健康状態	-2.70**	-1.58	-1.55
健康管理	-.79	.88	.29
財政状態	.65	-.32	.87
孫との距離	.21	-.89	-3.78***
性別	.43	1.65	-.36
年齢	2.55**	1.58	.03
教育年数	-.41	-.24	3.44***
R <sup>2</sup>	.36***	.30***	.43***

\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$

Lawtonの「心理的動揺」のみがプラスのやや強い影響を与え、他の変数の影響は現われていない。すなわち、高齢者が心理的な動揺をもっていれば、否定的感情も高まるというものである。なお、説明力を示すR<sup>2</sup>は肯定的感情が.43、否定的感情が.31であった。

## 3. Lawtonの3尺度を従属変数とした独立変数の重回帰分析結果

表3ではLawtonの「老いに対する態度」「心理的動揺」「孤独感・不満足感」の3つの尺度を従属変数とし、Ryffの2つの尺度および他の諸変数を独立変数とした重回帰分析の結果を示した(表3)。

その結果、Lawtonの「老いに対する態度」に影響を与えていたのは、健康状態と年齢のみであった。つまり、健康状態が悪く、年齢が高ければ「老いに対する態度」を高めるようである。Lawtonの「心理的動揺」ではどうか。Ryffの「否定的感情」のみがプラスの強い影響を与え、他の変数の影響はみられない。これは先の否定的感情を逆にした結果である。

Lawtonの「孤独感・不満足感」では、Ryffの「肯定的感情」と「人生への満足」、「孫との距離」がマイナスの強い影響を、教育年数

は逆にプラスの強い影響が認められた。つまり、肯定的感情と人生への満足が低く、孫との距離が遠いほど、また学歴が高いほど「孤独感・不満足感」を高めるようである。

これら3つの尺度の説明力を示す $R^2$ は、「老いに対する態度」.36, 「心理的動揺」.30, 「孤独感・不満足感」.43であった。

#### IV. 結論と今後の課題

筆者はこれまで高齢者の主観的幸福感と中年期の主観的幸福感に焦点をあて、考察を試みてきた。高齢者研究ではLawton (1975)によって開発された改訂PGCモラル・スケールを用い、中年期研究ではRyffら(2003)が開発した主観的幸福感(SWB)の尺度を用いてきた。しかし、同じ主観的幸福感という用語であっても、それを構成する質問の内容、質問の項目数、評価の仕方に違いがある。にもかかわらず主観的幸福感を測るこれらの尺度間にどの程度関連があるのか明らかにした研究はほとんどみあたらなかった。

そこで、本稿ではこれらの尺度間の関連を調べるために、Lawton (1975)の改訂PGCモラル・スケールのうち「老いに対する態度」「心理的動揺」「孤独感・不満足感」の3つの尺度に限定し、Ryffら(2003)の主観的幸福感(SWB)のうち6つの質問項目で構成される「肯定的感情」と「否定的感情」の2つの尺度を加え、計5つの尺度間の関連を相関分析の手法によって調べた。

さらに、Lawtonの3つの尺度とRyffら2つの尺度を交差させ重回帰分析によって、各尺度を従属変数とするとき、他の尺度がどの程度その尺度に影響を与えるかについても検討した。その際、Ryffらの主観的幸福感を測る要因として考えられている「人生への満足」1項目も独立変数に入れている。

また、本稿の対象者は高齢者であることから、健康状態、健康管理、家計などの財政状

態、孫との距離を独立変数として投入し、女性が多いこと、年齢では70歳以上が8割程度を占めること、教育年数も中卒程度が6割程度であることから、性別、年齢、教育年数といった基本属性も投入した。結果は以下のとおりである。

- (1) Ryffらの2つの尺度とLawtonの3つの尺度とのあいだには強い相関があり、「肯定的感情」とLawtonの3つの尺度ではマイナス、「否定的感情」とのあいだではプラスの強い相関を示した。
- (2) Ryffらの「否定的感情」を従属変数としたとき、Lawtonの尺度3「心理的動揺」のみが強い影響を与え、逆の場合にも同じことがあてはまった。つまり、心理的動揺が高ければ、否定的感情も高まり、逆に否定的感情が高ければ、心理的動揺を高めるというものである。
- (3) Lawtonの尺度5「孤独感・不満足感」にはRyffらの「肯定的感情」と「人生への満足」がマイナスに影響を与えていた。つまり、肯定的感情が低く、また人生への満足が低ければ孤独感・不満足感も高まることを示唆している。
- (4) 尺度1「老いに対する態度」にはどの尺度も影響を与えていない。しかし、健康状態はマイナスに、年齢はプラスに影響していた。このことは健康状態が徐々に悪くなるという年齢の効果を示唆している。
- (5) 「肯定的感情」尺度は、高齢者の健康管理を考慮したとしても十分に説明できなかった。他の変数のかかわりを調べる必要があるだろう。

最後に今後の課題についてふれたい。I. 問題の所在のところでも述べているが、本稿で扱うデータは層化無作為抽出による調査から得られたものではない。そのため、本研究で得た結果を一般化することには問題が残ることが考えられる。また、尺度の信頼性を測る $\alpha$ 係数について、とくにLawtonの3つの

尺度は平賀（2004）に比べてかなり低い数値である。しかし、同じ主観的幸福感という用語を使用しているが、これら5つの尺度間には強い相関があること、Ryffらの「否定的感情」の尺度とLawtonの「心理的動揺」の尺度はかなり近い尺度であることなどが示唆され、一定の成果を得たものと思われる。

では調査票に関してはどうだろうか。先に述べたように、Lawton（1975）の改訂PGCモラル・スケールは高齢者向けに開発されたものである。質問紙は「はい」「いいえ」の二者択一であり、選ぶ側に立てば即断が可能である。質問の内容も高齢者に適しており、尺度の命名も適切である。

一方、Ryffら（2003）の主観的幸福感（SWB）は中高年期に向けて開発された。質問紙は肯定的感情と否定的感情それぞれ6項目ごとに5段階評価で選ぶ形式である。選ぶ側に立てば、即断というよりは判断力に負荷がかかることが多い。このことから、調査する際、どの対象年齢に依頼するかによって主観的幸福感の質問紙を選ぶことが求められる。

今後、家庭と仕事のバランスを図りながら個々人の幸福感あるいは人生の満足を高めていくことが求められる中高年期、また慢性疾患あるいはがん疾患を抱えながら老年期を生きる人々、こうした人々がどのように生活を調整・再調整することが幸福感を高めることになるのか、われわれ研究する側につきつけられた課題である。

### 【注】

- (1) 平賀（2004）では、これら3つの尺度の信頼性係数 $\alpha$ は「老いに対する態度」（ $\alpha=.72$ ）、「心理的動揺」（ $\alpha=.71$ ）、「孤独感・不満足感」（ $\alpha=.62$ ）であったが、本稿では下記（3）に示すように、全体的に低い数値となっている。
- (2) 肯定的感情：「楽しい、機嫌がいい、とても幸せ、穏やか・安らか、満足、満たされている」の6項目（すべて逆転項目）。5段階評

価。平均：3.66、項目間の $\alpha=.90$ 。否定的感情：「悲しくて何も慰めるものがない、神経質、不安・落ち着かない、絶望、何事もおっくうに感じる、自分に価値がない」の6項目。5段階評価。平均：2.12、項目間の $\alpha=.80$ 。

- (3) morale 2：「老いに対する態度」 4項目
  - a.自分の人生は年をとるにしたがって、だんだん悪くなっていくと思いますか（逆転）。
  - b.あなたは去年と同じように元気だと思っていますか。
  - f.あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか（逆転）。
  - h.年を取ることは若いときに考えていたより、よいと思いますか。平均：1.42、 $\alpha=.46$ 。
 morale 3：「心理的動揺」 5項目
  - d.最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか（逆転）。
  - g.心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか（逆転）。
  - m.前よりも腹をたてる回数が多くなったと思いますか（逆転）。
  - p.物事をいつも深刻に考える方ですか（逆転）。
  - q.あなたは心配事があると、すぐおろおろする方ですか（逆転）。平均：1.36、 $\alpha=.50$ 。
 morale 5：「孤独感・不満足感」 3項目
  - c.さびしいと感じることがありますか（逆転）。
  - e.家族や親戚や友人との行き来に満足していますか。
  - o.今の生活に満足していますか。平均：1.30、 $\alpha=.15$
- (4) Ryffの「人生への満足」「とても悪い」1点～「とても良い」10点の10段階評価。「最近のあなたの人生は全般的にどのくらいか判断してください」平均：7.15。
- (5) 健康状態：「最近のあなたの健康状態はどの程度か判断してください」平均：6.11。  
健康管理：「最近のあなたはどの程度あなた自身の健康状態をコントロールしていますか。」平均：6.97。財政状態：「最近のあなたの財政状態について判断してください」平均：6.15。  
上述の3項目の質問は、いずれも「とても悪い」1点～「とても良い」10点の10段階評価。
- (6) 孫との距離：「もっとも身近なお孫さんはあなたの家から？」と尋ね、「同居」1点、「歩いて10分位」2点、「車で30分位」3点、「市内近郊」4点、「市外・道外」5点、の5段階評定。逆転項目とし、住む距離に近いほど点が高くなる。

【引用文献・参考文献】

- 布施晶子, 2002, 「北海道の家族：第 2 次世界大戦後の変化を中心に」『現代社会学研究』(15) : 27-61.
- 平賀明子, 2007, 「中年期カップルにおける肯定的感情と否定的感情—アメリカにおける中年期研究 (MIDUS) の日本版データにみる—」『現代社会学研究』VOL. 20, 94-113.
- 古谷野亘, 1981, 「生きがいの測定—改定 PGC モラル・スケールの分析」, 『老年社会科学』(3) : 83-94.
- 古谷野亘・西村昌記他, 2000, 「都市男性高齢者の社会関係」『老年社会科学』(22) : 83-88.
- 古谷野亘・安藤孝敏編著, 2003, 『新社会老年学』ワールドプランニング : 109-163.
- Lawton MP, 1975, “The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale ; A revision.” *Journal of Gerontology*, (30) ; 85-89.
- Mroczek, D. K., 2003, “Positive and Negative Affect at Midlife.” in Brim, O. G., & Ryff, C. D., & Kessler, R. C eds., *HOW Healthy ARE WE? : A National Study of Well-Being at Midlife*. The University of Chicago Press : 205-226.
- Mroczek, D. K., & C. M. Kolarz. 1998, “The effect of age on positive and negative affect : A developmental perspective on happiness.” *Journal of Personality and Social Psychology* 75 : 1333-1349.
- 直井道子, 2001, 『幸福に老いるために』, 勁草書房.
- Ryff, C. D., & R. C. Kessler, 2003, *HOW Healthy ARE WE?* The University of Chicago Press.
- Ryff, C. D., 1989. “Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being.” *Journal of Personality and Social Psychology* 57 : 1069-1081.
- 竹内 啓監修, 1999, 『SAS によるデータ解析入門』[第 2 版], 東京大学出版会.

[Abstract]

## The Relationships between Scales of Subjective Well-Being and Health Conditions, Household Finances, and Grandchildren : Using Ryff's Scales of Psychological Well-Being and Lawton's Morale Scale

Akiko HIRAGA

This paper investigates to what extent several scales of subjective well-being (SWB) correlate. They include three scales of M. P. Lawton (rev. 1975) : Scale 2 (Attitude Toward One's Own Aging), Scale 3 (Agitation), and Scale 5 (Lonely Dissatisfaction), as well as two by C. D. Ryff, et al. (2003) : positive and negative affect scales. This article also explains to what degree each scale is influenced by other scales, health conditions, household finances, and relationships with grandchildren. An interview survey was conducted among 109 elderly people. The results are as follows : 1) Ryff et al.'s two scales and Lawton's three scales of SWB correlated closely with each other. 2) Scale 3 (Agitation) had a strong positive influence on the negative affect scale. The converse was also true. 3) The positive affect scale and relationships with grandchildren had a negative influence on Scale 5 (Lonely Dissatisfaction). 4) Scale 1 (Attitude Toward One's Own Aging) received no influence from any other scales, but health conditions had a negative and age a positive influence on it, thus suggesting a gradual negative effect of age on health conditions.

